

# 稲田一八会

前橋の町草加市

小林外吉（稲田出身）

想い起こせば今から六〇年前、太平洋戦争真っ只中敗戦色濃厚な昭和十九年三月、稲田国民学校を卒業したその頃の紅顔の少年達と、うるわしき乙女の同級会の名称です。昭和十八年度卒業だから稲田一八会と名づけられました。僕らの小学校の頃は、男女七歳にして席を同じゅうせずの時代で男女別のクラスでした。異性を意識し始める思春期には、しょうしくて（憶えていますか？この言葉）お互いに言葉を交わすなんて事はなかなかできませんでした。なんとなく好きな女の子がいきました。早熟だったのかなあ？もしもその頃僕らが男女共学だったら、今のカミさんと一緒になっていたいなかっただろうか。

（冗談です）

定かではないが、今から数えて三十数年前女性連中だけで同級会を始めたらしいのです。当時は男子禁制のカーテンが

ぶら下がっていたのかなあ、ともあれ昭和の時代の終わり頃、男の誰かが女性達の色香に迷わされ？カーテンの中に消えました。「男のおまんた一緒になつて同級会をしないかねえ」といわれたのかどうか、はたまた男達が女性達の発する魔力に心身共にしばられて、無条件降伏をしたのかはよくは分かりませんが、それ以降毎年男女仲良く楽しくよろしくやっています。

僕も平成三年頃から喜んで参加しています。戦時の経済統制下、米どころの越後とはいえ当時の食糧事情はこのほか厳しく、関川の土手の草まで食べた苦しい時代を経験してきただけに、歳を重ねる毎に友一人ひとりが懐かしくいとおしく感じます。稲田一八会は毎年大体上越地方で開かれております。夜の宴会揃って踊る佐渡おけさや、いたこの盆踊り、小

学校唱歌の斉唱、あんちゃ、あねちゃの時代にもどつての四方山話に夜の更けるのも忘れます。翌朝、友の健康であることを願う再会を約束しての別れは、七十の坂を二つ三つ越した僕の胸に一抹の寂しさを感じさせます。

ふるさとは遠きにありて想うものでしたが上越もJR新幹線や車で約三時間余りと随分と近くなりました。懐かしい四方の山々は昔と変わらぬ姿で、多くの友は幼い頃と変わらぬ友情で、故郷を離れて住む私達を温かく迎えてくれます。しばらく休眠状態でした東京稲田会を今秋からでも再開したいと思えます。

